

住宅を作る事は、個人とまちとの距離感を作る事である。住宅の在り方によって、まちと一体的に過ごす事もまちと切り離して過ごすこともできる。建築によってまちとの多様な距離感を作る事ができること、それが住宅のもつ空間的な可能性であると考え。それをより自然な形で実現する設計のあり方として、まちに開かれた「はなれ」としての小屋を計画する事を提案する。

私が設計したHutという建築は、仕事の為の用途(資材倉庫)としてだけではなくリビングとしても使えるように計画した小屋である。個人の為の住宅でありながら、仕事関係の人も利用し、まちの人が訪れるサロンのような場所にもなっている。職住一体の小屋によって、住宅街のコミュニティ形成に寄与している。

現在計画中のA pottery atelierは、半屋外空間をまちとの接点としてもった陶芸アトリエである。建主からは、生涯(4~50年)陶芸活動を続ける意思を伺っており、背の高い鉄骨造の屋外廊下が、変化するまちのなかでランドマークとして存在し続けることを考えている。活動の継続性と建築の象徴性が一体化する事で、この小屋がまちの人に愛される存在になればと思う。

Pergolaという建築は、都市計画区域外に建つ農業用倉庫である。建主は敷地内に建つ古民家をセカンドハウスとし、休みの日に畑を少しずつ耕しながら生活している。核家族の為の形式的な住宅とは違い、家族の変容が進んだ事によって建主のライフスタイルが色濃く表れた多拠点生活のひとつとしての住宅の在り方である。

上記した3例はどれも、まちと家との間に小屋を計画した事例であるが、それぞれに求められた要望は違っていた。つまり、まちに対する開かれ方も少しずつ違っている。その微妙な差異は家単体による現われよりも、複雑で繊細である。今の時代に求められている住宅のひとつの在り方として、敷地の状況や多様化する建主の要望に、小屋のような建築で答えていく事に可能性を感じている。